



Title	ブレンターノのアリストテレス解釈 : カテゴリーとは何か
Author(s)	栗山, 雅俊; Kuriyama, Masatoshi
Description	
Citation	哲学, 37, 57-78
Issue Date	2001-07-15
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/48013
Type	departmental bulletin paper
File Information	37_57-78.pdf



ブレンターノのアリストテレス解釈

―カテゴリーとは何か―

栗山雅俊

一 序

ブレンターノは以下のように述べる。「ある das Seiende」はもつとも普遍的な概念として、すべてのものに述語される。それゆえ、「ある das Seiende」はおよそ精神の外にある存在 ein Sein außerhalb des Geistes を持つ限りでのすべてのものを、自身のもとへ包摂する。またそれらすべてのものは最も本来的な仕方である（もの）に帰属するのである⁽¹⁾。ブレンターノはアリストテレスが挙げた「ある」の多様な意味、すなわち（1）付帯性としての「ある」、（2）真偽としての「ある」、（3）「可能的にある」と「現実的にある」、（4）カテゴリーの形式としての「ある」のうち、前二者を非本来的ものとして斥け⁽²⁾、さらに、後者のうちの「カテゴリーの形式」に従う「ある」をもつとも本来的な「ある」の意味と考える⁽³⁾。

ところで、「カテゴリーの形式」とは一体何であろうか。アリストテレスは、今一つの「ある」の多様な意味⁽⁴⁾を、あるものは実体、あるものは性質、あるものは量というように、諸カテゴリーの意味の多様さとしてとらえている。しかし

ながら、このような分類としてとらえることにどのような意義があるのだろうか。また、その分類は単に「見つける毎に拾い上げた」(カント)ものに過ぎないものであろうか。さらに、「そもそも「多くの意味」とは何であらうか。そのように拾い上げられた相異なる意味のものが、「ある」というひとつの語で表されたとしても、それは単なる同名異義 *homonym* に過ぎず、およそ原理とは言えないものなのではなからうか。

本稿では、ブレンターノが論文『アリストテレスによる「ある」の多様な意味について』においてとらえた「カテゴリー」の意義を概観し、その論点を考察することによって、カテゴリーにかかわる諸問題を理解するための一助としたい。

二 カテゴリーの形式—ブレンターノの理解

まず、ブレンターノがなぜカテゴリーの形式を「ある」のもっとも重要な意味 *die wichtigste Bedeutung* (p.72) であると考えたのかを見ていくことにする。

ブレンターノの主張を集約すると、以下のようになると思われる。

(1) アリストテレスは「カテゴリーの形式」によって、単に言語の振る舞いや思考の規則を考えていたのではない。むしろ諸カテゴリーの各々は「最も高い類概念 *Gattung*」として、精神の外に「現実的にあるもの」にかかわり、それを包摂する。

(2) カテゴリーが「最上位の類概念」である一方、「ある *das Seiende*」は類概念ではなく、一種の同名異義的な概念である。しかしそれは単なる同名異義ではなく、諸カテゴリーの類比的な統一原理を意味する。

(3) 諸カテゴリーは個別的な実体に述語されることが可能であり、またその時カテゴリーは個別的な実体の「最高位の述語」である。

二一ー カテゴリーは類である

第一の論点でまず確認されるべきことは、諸カテゴリーは文の成分⁽⁵⁾として述語としての働きをもつだけではなく、「ある」と言われるもの(諸事物)のさまざまなありかたを意味する⁽⁶⁾独立した概念として考えられるいうことである⁽⁷⁾。

ところで、ある *hoc* は一つにはこれ(実体)を意味し、他にはどれだけ(量)あるいはどのように(性質)を意味する。(Met. Z4, 1030b11)

さらに、ブレンターノは『デ・アニマ』の第一巻冒頭部における、魂についての探究の指針が述べられる箇所注目する。
そこでは

おそらく最初に必要なことは、魂がどの類に区分されるのか、そして「何であるか」を確定することである。わたしが言うのは、魂は「これ」といわれるものすなわち実体であるのか、あるいは性質であるのか、あるいは量であるのか、あるいは他の分割されたカテゴリーのひとつなのかとどういふことである。(De anima, I, 1, 402a22ff.)

と述べられている。ここで注目すべきことは、実体、性質などの諸カテゴリーが類 *γενος* と呼ばれていることである⁽⁸⁾。プレンターノは、おのおののカテゴリーに属するものは、すべて同一義的なもの *synonym* であり、一方カテゴリーは、「ある」といわれるものの最も高い普遍者 *κοινωτα* であり、類であることが決定的なことであると考える⁽⁹⁾。

実体やその他の述語されるもの（諸カテゴリー）より以外には、何ら共通なもの *κοινωτα* は存在しない。

(Met. A4, 1070b1)

ここでは各々のカテゴリー自身が共通なものと呼ばれている⁽¹⁰⁾。諸カテゴリーは様々な諸事物を包摂するところの「共通のもの（普遍）」であり、それ以外にはいかなる「共通のもの」は存在しない。『自然学』第三巻では実体、性質、量などの様々なカテゴリーについて述べられる運動⁽¹¹⁾について、これらの運動がカテゴリーに包摂されるところの諸事物を離れて単独には存在しないことが述べられている。それは、諸カテゴリーの各々が諸事物を包摂する最上位の共通のもの（概念）⁽¹²⁾であり、それを超えた「共通のもの」は存在しないからである (Phy. III, 1, 200b34ff.)。

カテゴリーは「共通のもの」であり、また先に見たとおり類なのであるとすれば、それはつねに同一義 *synonym* なものであることになる。

と云うのは、類はすべての種に対し同一義的に述語されるからである。(Top. IV, 6, 127b6)

類は種に、そして種はさらに下位の種に述語され、最後には個別者へと行きつく (Cat. 3, 1b10ff.; Ibid. 5, 3a38)。動物(類)

は人間（種）に述語され、さらに人間（種）はソクラテスやカリアスといった特定の人間（個別者）に述語される。類とは自身のうちにあるすべての下属する種や個別者を包摂する。類とはそれらの種や個別者のためのいわば場所〇であるが、それは同時に、下位の種を包摂する同一義の概念なのである⁽¹³⁾。

二二二 ある⁽¹⁴⁾は諸カテゴリーの類比的な統一原理である

諸カテゴリーのそれぞれが最上位の類であるとする、カテゴリーを包摂するところの「より上位の類」は存在しないことになる。つまり、カテゴリー同志は互いに同一義synonymの関係を持たない。ではそのようなものが「ひとつの統一された原理」を持ちうるのだろうか。諸カテゴリーが類であり、同一義的な概念であるのに対して、「あるdas Seiende」は類概念ではない⁽¹⁴⁾。そのような概念がどのようなかたちで諸カテゴリーを包摂し、また諸カテゴリーは「カテゴリーの形式」という一つの名で呼ばれることが可能なのかが問題になる。

アリストテレスは次のように言う、

「ある」は多くの仕方で語られる。・・・すなわち「何であるか」または「これと言われる何か」（実体）を示し、他方「どのようなにあるか」（性質）、「どれほどあるか」（量）或いは他のこのような仕方です述語されるものの各々（他の諸カテゴリー）を意味する。（Met. Z1, 1028a10ff.）

カテゴリーにおいて共通なものは、それらがすべて「ある」と言われ、「ある」と言われるところの諸々のカテゴリーを

意味する⁽¹⁵⁾ということである。そうすると「ある」はカテゴリーの統一の原理として何ら問題なく認められるのであるか。そうではない。アリストテレスは「ある」をあると言われる「もの」の単一の類であるとは認めず、また諸カテゴリーもそれを包摂するようなより高い概念を持たないと言われるからである。

「類において異なっている」と言われるのは、それらのものの第一の基体が異なっていて、互いのうちに還元することも双方をひとつのものに還元することもできないようなものである。・・・およそ「ある」の述語の形式において異なっているものについてもそう言われる。(Met. Δ 28, 1024b9ff.)

類において異なっているものは、同一義の関係を有しない。それゆえ、諸カテゴリーは相互に同一義的なものではない。従って、それらに「ある」が述語されたとしても、その場合の「ある」の意味は同一義ではありえず、同名異義 homonym であることになる⁽¹⁶⁾。

では同名異義の関係とはどのような関係なのであろうか。たとえば英語の stone は岩を意味するが、同時に「揺れること」も意味する。これらの二つの意味には内的な関係はない。このような「同名異義」に共通な原理など存在するのであろうか。むしろ同名異義とは偶然的なものにすぎないのではないか。ブレンターノは「ある das Seiende」を一種の同名異義的な概念であると考えるが、一方で同名異義には『カテゴリー論』第一章で述べられたものとは異なつた仕方の分類があることを指摘する⁽¹⁷⁾。『ニコマコス倫理学』では以下のように述べられる。

従って、「善」は単一のイデアによつて共通なる何ものかではありえない。ではなぜそのような共通ではないもの

が(等しく)「善」と言われるのだろうか? それは偶然による同名異義に拠るものであるとは思われない。それならば、ひとつの善から出現しているゆえにであろうか、或いはすべてのものがひとつの善へ向かっているがゆえにであろうか、或いはむしろ類比のゆえにであろうか? (Etic. Nic. I, 6, 1096b25ff.)

ここでは『カテゴリー論』で挙げられた同名異義が「偶然による同名異義」と名づけられ、さらに類比(アナロギア)による同名異義と区別されている。ではここで述べられている「類比」とはいかなるものなのか。ブレンターノによれば、アリストテレスの有名な類比概念、つまり「四項比例」ないし「質における比例」としての類比は、少なくとも「ある」の類比の意味ではない⁽¹⁸⁾。むしろ、アリストテレスは「ある」の概念に上記の類比とは異なる特別な「類比関係」を認めていると考える。『形而上学』第四卷(Γ卷)二章で以下のように述べられる。

「ある」は多くの仕方で語られるが、それはひとつのものないしは何らかひとつの自然ousとの関係で言われるのである。それは同名異義的ではなく、むしろすべての健康的なものが「健康」との関係で言われるように……である。(Met. Γ2, 1003a33ff.)

アリストテレスはそれぞれのカテゴリーにそれぞれ全く異なった意味での「ある」が対応すると言っているのではなく、すべてのものが「ひとつのものないしひとつの自然との関係で」とあると言われると主張しているのである。そして、その一つの自然とは、実体のことなのである⁽¹⁹⁾。

それらが「ある」と言われるのは、或るものは実体だからであり、或るものは実体の属性だからであり、或るもの

は実体への道(生成)であり、あるいは実体の消滅であり、あるいは実体の欠如であり、あるいは実体の性質であるゆえ……。 (Ibid. 1003b6ff.)

ブレントラーはこのような類比(アナロギア)を、同じ項への類比 die Analogie zum gleichen Terminus と呼ぶ⁽²⁰⁾。そして、このような「類比」は同一義と区別される。後者は本来の意味での「ひとつのものに即して」言われるのであり、前者はむしろ「ひとつのものとの関係で」言われる。しかしながら、このような類比もまた、ある意味では「ひとつのものに即して」言われているのである⁽²¹⁾。

二―三 カテゴリーは個別の実体の述語となりうる

前述の通り、「ある」は同一義的な概念ではなくいわば類比的な統一原理であり、その意味を最も本来的に担うのが実体のカテゴリーであった。ここでは再び諸々のカテゴリーがどのような仕方であるものかの述語となることができるとかを見ていくことになる。まず、(1) 諸カテゴリーは個別的な諸実体(第一の実体)に述語されることができ、次に、(2) カテゴリーとは「述語となることができるもの」であり、実体のカテゴリーとは自己述語的なカテゴリーである、さらに、(3) 実体以外のカテゴリーはそれぞれ第一の実体とのある特定の関係に従って区別されることが確認される。ブレントラーは以下のように述べる。すなわち諸カテゴリーはすべて個別的な実体に対して述語されえ、またその時カテゴリーは個別的な実体の最も高い述語となるということである⁽²²⁾。アリストテレスによれば、

種は個別者に述語され、また類は種に対して、そして個別者に対して述語される。(Car. 5, 3a38)

あるものが基体(主語)としての別のものに述語されるならば、その述語されたものについて言われる(述語される)ものはその基体(主語)についても言われる(述語される)であろう。たとえば「人間」は「ある特定の人間」に述語され、また「動物」は「人間」に述語される。それゆえ「ある特定の人間」に対しても同様に「動物」は述語されるであろう。(Ibid. 3, 1b10ff.)

アリストテレスは個別的な実体を「第一の実体」と名づけた(Car. 5, 2a11) ⁽²³⁾。そして、第一のカテゴリーすなわち実体についても、その個別者が第一の実体なのであるから、実体に述語されるものはすべて個別的な実体にも述語されるのである。そして、このことは他のカテゴリーについても同様である。実体ではないすべてのものも偶有性 *accidens* として実体に属し、またその実体に属する限りである *send* のだからである。それゆえ、他の諸カテゴリーも実体に述語され、それゆえ個別的な実体にも述語されるのである ⁽²⁴⁾。

ここで問題となるのは、アリストテレスの第一の実体に関する規定は、述語としての実体の欄を空位にするのではないかという指摘である ⁽²⁵⁾。

実体とは、最も本来的な、第一の優れた意味では、けっしてある基体について言われず、またある基体のうちにもないものである。(Car. 5, 2a11)

ブレントラーノは実体、特に個別者としての第一実体が主語の位置に来るものであることを主張する諸説に対し⁽²⁶⁾、諸カテゴリー自身はあくまで述語としての性格を持つことを強調する。カテゴリーそのものは疑いなく「述語となる *Prädikat* *essentia*」能力を持ち、しかもカテゴリーはそういった能力を他のどんな概念にも先だつて持っている。つまり個別者であれ、種ないし類であれ、どのようなものもこれら諸カテゴリーの主語となり得ないものはなく、他方これらの主語に対し諸カテゴリーより高い述語を見出すことができないという仕方なのである⁽²⁷⁾。

では、どのような主語に対し実体のカテゴリーは述語となりうるのであろうか。ブレントラーノは第一の実体は自身について述語されることができると考える。アリストテレスが斥けたのは、実体が他のものの述語となることなのである⁽²⁸⁾。

あるものども *ἐν ὄντι* のうちで次のようなものがある。すなわち他の何ものにもけつして述語されえないものであり、たとえばクレオンやカリアスや個別的なものや感覚的なものである。(Anal. Prior. I, 27, 43a25)

ブレントラーノは実体のカテゴリーとしての述語づけに以下の二つの可能性を示唆している。

ソクラテスは人間である。

(1)

ソクラテスはソクラテスである。

(2)

述語としての「実体のカテゴリー」は主語 || 第一の実体と本質的な同一性 *essentielle Identität* を持つが、その概念把握においてより普遍的であり、その限りで異なっている場合(上記(1)の例)、概念としても主語と一致する場合(上記(2))

の例)がある。これが『カテゴリー論』で述べられている「第一実体」と「第二実体」の区分に対応するとブレンターノは考える(26)。

個別者であるところの第一実体は他のものの述語になることはできないが、自身の述語となることができ。さらに、「第一実体」と「第二実体」は二つの異なった実体を示しているのではない。第二実体は第一実体の種 $\Delta\mu\alpha$ であり、同じ一つの実体の専ら概念的な区分 $\delta\iota\omicron\upsilon\delta$ *rationelle Distinktion* なのである(27)。

二一四 個別の実体と実体以外の諸カテゴリー

実体のカテゴリーが精神の外に現実的にあるものにかかわり、それを適切に示すことができるのだとすれば、他の諸カテゴリーについても同様のことが考えられるはずである。アリストテレスによれば、他のすべての諸カテゴリーは実体との関係で言われるのであり (Met. T2, 1003b9)。

これらのものがより優れてあるもの *τὰ σίμια* であるように見えるのは、それらに対し基体となっておりある特定のものが存在するからである。それが実体(ウーシア)であり個別的なものであり、これがそういった述語のうちに含まれている。……従って明らかに後者(実体)があるゆえに前者(他の諸カテゴリー)もあるのである。(Met.

Z1, 1028a25ff.)

他の諸カテゴリーはその基体となるところの実体なしには存在しえない。逆に言えば、基体となる実体が存在する限りに

において、他の諸カテゴリーもまた適切な述語であり、本来的な意味で「あるもの」なのである。(31)。

類において異なっているとされるのはそれらのものの第一の基体⁽³²⁾が異なっていて、一方が他方に還元されることもなく、また双方が同じもののうちに還元されることのないものである。・・・またおよそ「ある」のカテゴリーの形式が異なるものも、類において異なっているとされる。(Met. A28, 1024b9ff.)

諸々のカテゴリーは同一義的な最上位の類概念であり、それらは互いに他のものへ還元することができない。それらは類において異なつた「あるもの」であり、それは固有の仕方であるところの基体であるところの実体とかかわりを持つ。つまり、一つの实体に述語される諸々のカテゴリーは、同じ基体に対する異なつた内属 *Inhärenz* の仕方を持たなければならないことになる⁽³³⁾。

実体以外の諸カテゴリーは、単に実体にとって付帯的なもの *Accidens* として「付帯的なもの」という一つの類に包摂されるものではない⁽³⁴⁾。むしろ、実体に対する固有の内属の仕方に従い、固有の「あるもの」として述語される。

言われる(述語される)のとちやうと同じ数だけ、ある *to eivai* の意味がある。(Met. A7, 1017b23)

述語としてのカテゴリーは、言われた仕方の数だけ、すなわち述語された仕方の数だけ「ある *sein*」を意味し、それと同じ数の最上位の類 *die höchsten Gattungen* へ「あるもの」は区分されるのである。カテゴリーは単に述語の仕方であるというばかりでなく、それは諸事物の最上位の類であり、そして様々な「ある」の意味 *die Bedeutungen des Seienden* なのである⁽³⁵⁾。

三 問題と展望

以上ブレンターノの理解を駆け足で辿ってきたが、ここまで見てきた中でもいくつか検討すべき問題が含まれているように見える。ここではその中で特に主要な論点について言及するに止まるが、今後の研究の指針としたい。

三― 類はなぜ「あるもの」を包摂できるのか

ブレンターノは諸カテゴリーが現実的に「あるもの」にかかわり、それらを包摂することができる根拠として、カテゴリーもまた「あるもの」の類であることを示そうとしたことは以上で見てきた通りである。しかしながら、類そのものに對しても同じ問いを発することができるのではなからうか。そもそも「類」が諸々の事物を包摂することができるのはなぜであらうか。

アリストテレスは『形而上学』の「哲学難問集」(第三卷)で以下の問いを発している。

また(ものの)諸原理のうち類が構成要素であり原理であるとみなすべきものなのか。(Met. B3, 998a21)

さらに同巻四章では、同一のもの、普遍的なものと同様の認識の関係が問われている。

もし個別的なものども τα καθ' εαυτα 以外には他に何ものも存在せず、個別的なものどもが無限に存在するのだ

とすれば、そういった無限なものどもについて知識を持つ（認識する）ことがいかにして可能なのだろうか？ というのも、我々が何かを知る（ことができる）のは、そこに何か一つであり同じものがあり、何らか普遍的なものが内在しているかぎりにおいてだからである。（Met. B4, 999a26ff.）³⁶⁾

類は個別的な諸事物を離れて単独では存在しえない。しかし他方で類が存在せず個別的なもの、感覚的なもののみが存在するとすれば、われわれは何ものも認識することはできないのである³⁷⁾。

アリストテレスはわれわれの認識活動と言語行為（言明）において、「普遍的なもの」すなわち類が大きな役目を果たすこと、そしてそれが重要な問題提起を促すことを自覚していた。それに対し、どのような回答が与えられたのか、アリストテレスは最終的に類をどのようなものとして捉えることができたのかが問題になる。

三―二 類比的統一原理としての実体

さらに大きな問題として、諸カテゴリーを統一する原理の問題がある。ブレンターノ自身が述べているとおり、シンプリークスから近代に至るまで、アリストテレスのカテゴリーの列挙と区分には原理 *Principium* が欠けているのではないかという指摘が幾度かなされてきた³⁸⁾。これまでの探究から、「カテゴリーの形式」には何らかの統一的原理が見出されたと言えるであろうか。

ブレンターノは以下のように述べる、われわれは諸カテゴリーの区分の根拠が、諸カテゴリーの第一実体のうちで

の⁽³⁹⁾、さまざまに存在の仕方 *die Weise der Existenz* であることを示さうと試みてきた(本稿二―四節)。そして、かの統一性は同じ項への類比 *die Analogie zum gleichen Terminus* に於いて見出される(本稿二―二節)⁽⁴⁰⁾。

「ある」は多くの仕方で行われる。……これらのうち第一義的な「ある」は「何であるか」であり、それが実体を意味することは明らかである。……他のものが「ある」と言われるのはこのようなあるもの(＝実体)の量であるか、あるいは性質であるか……のゆえである。(Met. Z1, 1028a10-20)

「同じ項」とは実体のことであり、またプレントーンによれば第一の、最も本来的な実体とは個別者であるところの第一実体のことであった。そして、この「第一の実体」のうちにあるさまざまの「あるもの」が、諸カテゴリーとして第一の実体に述語されるのである。

さらにプレントーンは、上記の類比的な統一性が、同一義な *synonym* 概念としての類の役割を、たとえ劣った仕方によ充分代理することができるという。プレントーンはアリストテレスが「あるもの」についての「学」について言及している箇所で、「一つの自然との関係」すなわち同じ項 *Terminus* への類比においても一つの学が成立すること、さらに「一や「ある」の種 *an* が述べられてゐることに注目する。

単に一に即して(同一義的に)言われるものどもについてばかりでなく、一つの自然との関係で言われるものどもについての研究もまた一つの学に属する。(Met. Γ2, 1003b12)

「一」の種と同じ数だけ「ある」の種 *etion* もある。これらの「何であるか」を考察することは類において *to yevet* 一つの学に属する。(Ibid. 1003b33)

ブレントノーはこの「ある」についての「種」とはカテゴリーに他ならないと考える。もちろんこの場合は通常の意味での類や種ではなく、いわば類比的な意味で言われていると考えるべきであろう⁽⁴¹⁾。しかしながら、たとえ類比的な意味にせよ「ある」の種が語られ、それについて一つの学が存在することが本当ならば、「ある」の概念が同一義の概念ではないということによって、この概念から諸々のカテゴリーを演繹できる可能性を拒む決定的な理由とはならないと考える。ブレントノーは「アリストテレス自身が到達できたはずであり、しかし実際はなされなかった」⁽⁴²⁾カテゴリーの演繹を自ら試みるのである⁽⁴³⁾。

ブレントノーはカテゴリーの演繹を待つてはじめてカテゴリーを統一する原理と諸カテゴリーの関係を遺漏なく示すことができると考えていたようである。「カテゴリーの演繹」についての詳細の解明と検討は別の機会に譲らざるを得ないが、本稿ではブレントノーがカテゴリーを統一する原理をどのような仕方で見出し得たと考えたのかを確認したことで満足しなければならぬ。

三―三― もう一つの類比―「ある」の類比について

ブレントノーとともに見てきたことは、カテゴリーの統一をになう類比がある特定の存在、すなわち実体の存在を原理とするということであった。しかしながら、実体も含めすべてのカテゴリーが「ある」と言われることは、この類比につ

きるであろうか。本稿二―二節で見たアリストテレスの「ある」の類比についての説明をふたたび取り上げると、

それは同名異義的ではなく、むしろすべての健康的なものが「健康」との関係で言われるようにである。つまり、

あるものは健康を維持するがゆえに、あるものは健康を生じさせるがゆえに……健康的と言われる。(Met. I2,

1003a34ff.)

健康的であると言われるのは、それらのものすべてが「健康」という一つの概念ないし形相⁽⁴⁴⁾を受け入れているからであり、それゆえ等しく「健康的」と言われるのである。しかしながら、実体についても同じことが言えるであろうか。むしろ実体が「あること」によつて、他の諸カテゴリーで述べられるものもまた「ある」と言われるのではなからうか⁽⁴⁵⁾。ここでわれわれは今ひとつの類比に出会うことになる。つまり「ある」と言われる限りでの「ある」の類比である。すべての健康的なものが健康との関係で言われるように、すべてのあるものは「ある」との関係で言われるのである。そして、カテゴリーの形式における「ある」についても同じことが言える。つまり、実体以外の諸カテゴリーはそれが何らかの仕方で実体の存在に依存しているとしても、やはりそれは「あるもの」であり、それぞれが固有の「ある」の意味を持つからである⁽⁴⁶⁾。本稿ではこのことを指摘するに止まるが、これは(1)付帯性、(2)真偽、(3)可能態と現実態としての「ある」の意味との関係も含め、今一度立ち入った検討が必要であると思われる。

(終)

- (1) プレンターノ『アリストテレスによる「ある」の多様な意味について』Von der mannigfachen Bedeutung des Seienden nach Aristoteles, 1862 p.40. 今後特に断りがない場合は章番号、ページ数のみを示す。
- (2) アリストテレス『形而上学』第六巻(E巻)第四章の記述が典拠であるが、本稿ではこの問題に立ち入らない。
- (3) 今ひとつの本来的な意義を担う区分、「可能的にある」「現実的にある」については、極めて重要な論点が存在するが本稿で論述することができない。プレントラーノは、アリストテレスの言う「能力(または可能性)」を単なる思考上あるいは論理的な可能性ではなく、現実化可能な状態(現実態となる能力があること)と考える。
- (4) 周知の通り、アリストテレスは「ある $\mu\omicron\mu\epsilon$ は多くの仕方で行われる」という表現を広狭二義に使い分けているが、前掲の四つの意味よりもカテゴリーの各々(実体、性質、量・・・)を列挙する場合は圧倒的に多い。
- (5) 『命題論』第四章では、 $\alpha\lambda\omicron\gamma\omicron\varsigma$ をその成分に分解するとそれ自体は単なる言表にすぎず、肯定(ないし否定)言明(命題)にならないことが指摘されている(1b26以下)。また別の箇所アリストテレスは真あるいは偽を不す命題を結合 $\sigma\upsilon\lambda\lambda\omicron\gamma\omicron\varsigma$ と分離 $\sigma\upsilon\lambda\lambda\omicron\gamma\omicron\varsigma$ という語を使って説明している (Met. E4, 010)。これに対して、『カテゴリー論』第四章でアリストテレスは一〇個の範疇を「いかなる結合にもよらずに言われるもの $\tau\acute{\alpha}$ $\kappa\alpha\tau\alpha$ $\mu\eta\theta\epsilon\mu\acute{\alpha}\tau\alpha$ $\sigma\upsilon\lambda\lambda\omicron\gamma\omicron\varsigma$ $\lambda\epsilon\gamma\omicron\mu\epsilon\tau\alpha$ 」と呼んでいる (1b25)。
- (6) アリストテレスは $\sigma\mu\upsilon\lambda\lambda\omicron\gamma\omicron\varsigma$ という語を使うが、この語については別途詳しい考察が必要であると思われる。
- (7) プレントラーノはカテゴリーを(1) それ自体は具体的なものを示す概念ではなく、むしろさまざまな具体的な概念がそこに容れられるところの枠組み $\rho\alpha\chi\omega\tau\epsilon\kappa$ であるとする説(フランティス、ツェラー)、(2) カテゴリーの本来の意義は判断の部分つまり述語 $\rho\alpha\sigma\iota\tau\acute{\alpha}$ であり、それは文法的関係を起源に持つとする説(トレンテンブルク)、(3) カテゴリーは独立した概念であり、それはあるものの最高類 die $obersten$ $Geschlechter$ des $Seienden$ をあらわすとする説(ポニーッツ)に分類し、ポニーッツの説に従う(同、第五章一節76頁以下)。ポニーッツ[1853]もプレントラーノもトレンテンブルクのいわば「カテゴリー文法起源説」を批判するかたちで自説を展開している。
- (8) 以上第五章二節82—83頁。さらにプレントラーノは諸カテゴリーの類 $\tau\acute{\alpha}$ $\gamma\epsilon\upsilon\gamma\alpha$ $\tau\omega$ $\kappa\alpha\tau\eta\gamma\omicron\mu\acute{\alpha}\tau\omega$ (『トピカ』一巻一五章など)、述語されたもの $\kappa\alpha\tau\eta\gamma\omicron\mu\eta\mu\alpha\tau\alpha$ (『自然学』三巻一章など)、 $\kappa\alpha\tau\eta\gamma\omicron\mu\eta\mu\epsilon\tau\alpha$ (『形而上学』A巻一章)、『言われた(言明された)もの $\lambda\epsilon\gamma\omicron\mu\epsilon\tau\alpha$ (『カテゴリー論』四章など)』という表現を挙げている。これらはすべて実体、性質、量などの列挙されたカテゴリーの名として使わ

- れている。
- (9) 第五章四節98頁以下。
- (10) プレンターノはアリストテレスの言う共通なもの *κοινόν* には (1) アナロギアによって共通なもの (2) 同一義なものとしての共通なもの (普遍) の二義があることを指摘している。前者の例としては「共通なもの (普遍は実体ではない) (Met. Z16, 1040b2)」、「ある」は共通のものである」(Ibid. 12, 1053b19) などである。カテゴリーが「共通なもの」といわれる場合は同一義なものとしての普遍の意味である。
- (11) アリストテレスのいう運動 (キネシス) は現代のそれよりも広い概念で、生成・消滅 (実体のカテゴリー)、質的变化 (性質)、増大・減少 (量)、場所的移動 (場所) の四つを含む。これらを総称して転化 *μεταβολή* と呼ぶこともある。
- (12) カテゴリーが「あるもの」の最高類であるという見方はすでにポニーッツが提起している。ポニーッツは『ソフィスト論弁駁』第二章の同一でないものが同じ表現を使うことに起因する虚偽についての説明 (1784以下)、『ニコマコス倫理学』第一巻第六章のイデア論論駁の箇所 (1096a23以下) から、以下のような結論を導き出している。「カテゴリーはある *das Sein* をその語の最も普遍的な意味において所持しているところの多様な意味を示す。カテゴリーは最高位の類 *Geschiehter* であり、あるもの *das Seiende* の全領域を区分する。すなわち「あるもの」はすべてひとつの、カテゴリーに属さねばならず、複数のカテゴリーに同時に属することはできないという仕方である」(Bonitz[1853], p.599)。
- (13) 第五章二節85頁。
- (14) Met. B3, 998b22 「ある (存在) も一も存在する諸物の単一の類であることは不可能である」。
- (15) 前述の通りこれは *σημαίνειν* の訳である。この名詞形は *σημαίνω* (＝記号、印) であり、それゆえ「示す」と訳す場合もある。
- (16) 第五章三節86頁以下。また『カテゴリー論』第一章の「同一義」「同名異義」の分類参照。
- (17) 同、91頁以下。
- (18) アリストテレスが「四項比例」としての類比を語っている箇所は『ニコマコス倫理学』第五巻第三章 *νικηται* 以下、「質の類比」については『生成消滅論』第二巻第六章 333a23以下、『動物部分論』第一巻四章 641a16以下。
- (19) 同、94頁。実は、健康的なものが健康との関係で類比的に呼ばれる場合の類比と、カテゴリーにおいて「ある」と言われるものが実体と類比的にいわれる場合の類比はその仕方が異なっている。「健康的」と言われる場合はすべての述語「健康的である」に健康の概念が含まれるのに対し、「ある」という概念そのものには実体のそれは必ずしも含まれているとは言えないからである。これについては後述する。

- (20) 正確にこの表現が使われる箇所としては、第五章三節85頁、同六節109頁、同一二節146—147頁などであるが、他の箇所では若干異なった表現も用いられている。
- (21) 同、95—96頁。一つに即して *καθ' ἐν* の多義性は「あるものについての学」が述べられている箇所と言及されているものである (Met. T2, 1003b13)。
- (22) 第五章五節102頁。
- (23) 周知の通り第一の実体 *ἐστὶν οὐσία* という表現は『カテゴリー論』のみ存在する表現で、これは同書の偽書説も含め問題になるところである。プレントナーは一貫して同書をアリストテレスの真作と見なし、また他の著作と整合的に解釈しようと試みている。これと似たような表現として『形而上学』Z巻三章には第一の基体 *ἡ ἀρκητικὴν φύσιν* という語があるが、そこでは (1) 質料 (2) 形相 (3) 質料と形相の結合体の三つの可能性が示唆されている。また、同章では上記の実体の定義は不十分であることも指摘されている (1029a7ff.)。
- (24) 同。ここで注目されてよいことは、プレントナーがさしあたってカテゴリーを個別的な実体にのみ適用しうると言っているのではなく、むしろ個別的な実体「もまた」カテゴリーの適用を受けることができることと述べていることである。ただし、後に続く箇所では第一の、最も本来的な実体とは第一実体であると述べられ、以降の諸カテゴリーの考察は専ら第一実体との関係で論じられている (第五章六節109頁以下)。
- (25) 以下同105—106頁。一般に実体の主語的性格、述語的性格というかたちで問題にされることが多い。
- (26) 同。トレンデンブルクはカテゴリーに述語としての性格を強調する一方で、本来の意味での判断、言明は実体が主語の位置にくと考える。「それゆえ主語は第一のカテゴリーすなわち実体へ、述語は残余のカテゴリーへということになる。しかしながら実体も個別者ではなく普遍者として理解されるならば、述語となりうる」(Trendelenburg[1846], p.18-19)。ポニーッツはトレンデンブルクの矛盾を指摘し、カテゴリーは述語というよりも一定の意味で述べられる端的な言明 *Aussage* と捉えるべきだと反論するが、実体(のカテゴリー)が本来的には主語の位置にくるといふ見解は相変わらず堅持されている (Bonitz[1853], p.616-623)。
- (27) 同、107頁。
- (28) 第五章七節121頁。
- (29) 第五章一三節150頁。
- (30) 第五章一〇節132頁。プレントナーは同じ箇所『命題論』七章の記述に触れ、個別者に対し普遍者が述語される場合もこれらが異なった実在性を持っているのではなく、むしろ事態としての普遍 *das Universale als τὸ πᾶν* が個別者のうちにその存在を持つからであ

ると説明している。ただし、個別者と普遍者、ないし『カテゴリー論』での第一実体と第二実体については、『形而上学』でのカテゴリーの呼称 (Zōgen nichte Wort) の解釈とも関連し、別途より立ち入った考察が必要である。

(31) 第五章五節104頁。

(32) この「第一の基体」が何を意味するかについては定説がない。(1) 最上位の類(カテゴリー)、(2) 最下位の種、(3) 質料、(4) 定義の部分などの説があるが (Kilwan[1971]) の分類、それぞれ難点がある。ここでは異なった類(上下関係に包摂されないような類) が互いに還元不可能な概念であることを確認するだけで充分であると考える。

(33) 第五章六節112頁。布伦ターノは同節で質料概念を使って基体としての実体と、それに述語される実体以外の諸カテゴリーとの関係を分析している。質料(ヒュレー) はアリストテレスの実体論を考える上で最も重要な概念の一つであるが、ここでは広義の「ある」の分類の一つである可能態と現実態の概念と深くかかわっていることを指摘するにとどめる。

(34) もちろんここで付帯性とは実体以外のカテゴリーについて言われる「自体的な」付帯性のことであり、広義の意味での付帯性ではない。

(35) 同、116—117頁。

(36) これに続く叙述から、アリストテレスは「普遍的なもの(ト・カトルー)」という語で類のことを考えていることがわかる。

(37) 以上の議論は『形而上学』B巻三章 998b14—999a23、同四章 999a24—999b24 参照。

(38) 第五章二節144—145。それゆえトレンデンブルクは実体Ⅱ名詞、性質と量Ⅱ形容詞、場所と時間Ⅱ副詞というように諸カテゴリーと文法規則の一致を見出すことにより、彼の「文法起源説」を主張した (Trendelenburg[1866], p.23ff. なお第五章一五節参照)。ポーンツは逆に、カテゴリーの意義は「ある」についての学の手引き *Einleitung* として経験に与えられた内容を概観するところとあり、それゆえそこになんらか形而上学的な決定がなされているわけではないと考える。これによればカテゴリーは最高類として経験的な事物を包摂するに止まり、それを統一するより高次の原理は存在しないことになる (Bonitz[1853], p.603-609)。

(39) 原文は *in der ersten Substanz* である。この表現は他の箇所でも出てくる (第五章七節114頁) が、カテゴリー演繹の箇所 (第五章一三節153頁以下) ではより細かく規定されている (註43参照)。

(40) 同、146頁。

(41) 同、146—147頁。布伦ターノも「*いわゆる sogenannt*」という表現を使っている。

(42) 同、147—148頁。

(43) 第五章二三節148頁以下。本稿では詳細を論ずる余裕がないが、布伦ターノはまず『分析論後書』第一卷二二章にある実体と付帯

性の区分を取り上げ、次に『形而上学』N巻二章の実体、属性、関係、さらに属性は(1) 内在的なもの(性質、量)、(2) 状況(場所、時間)、(3) 作用(能動、受動)というように、アリストテレスの著作を逐次引用しながら分割・演繹を行っている。

(44) 形相(エイドス、モルフエー)についてはここでは詳述できないが、アリストテレスは何かであると言われるところのもの(たとえば健康)は単にわれわれの名づけの行為を思考のうちにあるばかりではなく、言われている当のもの(たとえば身体)にいっしょに在してゐることを考へる。

(45) これについては『形而上学』N巻一章(1028a28)の εἰδησιῶν せうじう解釈するかによつて異なつてくるが、詳論は別の機会に譲る。

(46) 本籍二一四節参照。

文献

- (一) Brentano[1862] Brentano, F. *Von der mannigfachen Bedeutung des Seienden nach Aristoteles*, Freiburg, 1862.(2. Nachdruck Aufl. 1984, Hildesheim)
- (2) Ross[1924], II Ross, W. D. *Aristotle's Metaphysics, a revised text with introduction and commentary*, Oxford, 1924.
- (3) Ross[1936] Ross, W. D. *Aristotle's Physics, a revised text with introduction and commentary*, Oxford, 1936.
- (4) Jaeger[1957] Jaeger, W. *Aristotelis Metaphysica*, Oxford, 1957.
- (5) Mino-Paluello[1956] Mino-Paluello, L. *Aristotelis Categoriae et libri de Interpretatione*, Oxford, 1956.
- (6) Ross, Mino-Paluello[1964] Ross, W. D., Mino-Paluello, L. *Aristotelis Analytica Priora et Posteriora*, Oxford, 1964
- (7) Bywater[1894] Bywater, I. *Aristotelis Ethica Nicomachea*, Oxford, 1894.
- (8) Trendelenburg[1846] Trendelenburg, A. *Geschichte der Kategorienlehre*, Berlin, 1846. (Nachdruck, 1963, Hildesheim)
- (9) Bonitz[1853] Bonitz, H. *Über die Kategorien des Aristoteles*, Sitzungsberichte der Kaiserlichen Akademie der Wissenschaften. Phil.-hist. Kl. 10. Band, Wien, 1846(S.591-645). (Nachdruck, 1967, Darmstadt)
- (10) Barnes[1984] Barnes, J.(Ed.) *The Complete Works of Aristotle, The revised Oxford translation*, Princeton Univ. Press, 1984
- (11) Kirwan[1971] Kirwan, C. *Aristotle's Metaphysics Books T, A, E Translated with Notes*, Oxford, 1971.